

論文の内容の要旨

論文題目

母親の乳がんへの罹患が
思春期の子どもの Posttraumatic Growth に及ぼす影響と
母親とのがんに関するコミュニケーションとの関連

氏名 大城 怜

【序文と目的】

乳がんの罹患率は最初のピークが 40 歳代後半の子育て世代であることから、未成年の子どもをもつ乳がんサバイバーは少なくない。母親の乳がんへの罹患による子どもの影響について、近年では心的外傷後成長 (Posttraumatic Growth, PTG) の報告もされている。がんサバイバーの子どもを対象とした質的研究から、母親が乳がんと診断され治療を受けたこと、生活が変化したことで、子どもは PTG を経験していると推察されるが、PTG の程度、関連要因は明らかになっていない。

乳がんに関してコミュニケーションをとることは、子どもの心理的健康にとって重要な影響要因であるものの、母親である乳がんサバイバーにとっての懸念事項でもある。がんに関して適切なコミュニケーションをとることで、子どもは PTG を経験すると考えられるが、これらの関連は明らかになっていない。

本研究の目的は、乳がんサバイバーの思春期の子どもにおける

- ・ PTG の実態を明らかにすること
- ・ PTG の関連要因を明らかにすること
- ・ PTG と母親とのがんに関するコミュニケーションの関連を明らかにすること

の 3 点である。

【方法】

1. デザイン・研究協力施設・調査期間

自記式質問紙調査を用いた横断的観察研究を実施した。がん診療連携拠点病院 3 施設と患者会 2 施設で、調査は 2019 年 2 月から 2019 年 8 月まで実施した。

2. 対象者

乳がんサバイバーとその子ども(各サバイバーに対し 1 名)とした。乳がんサバイバーの包含基準は 10 年以内に乳がんと診断され、標準治療を開始した女性とした。子どもの包含基準は 12-18 歳の中学生以上の者で、母親の乳がんを知らされていること、知らされた時の年齢が 7 歳以上、母親と同居していることとした。

3. 調査項目

子どもの質問紙調査において、PTG は the revised PTGI for Children (PTGI-C-R)、ストレス症状は Posttraumatic stress disorder checklist for DSM-5 (PCL-5)、ソーシャルサポ

ートは Multidimensional Scale of Perceived Social Support (MSPSS)を用い測定した。母親とのがんに関するコミュニケーションは、先行研究から項目を抽出し、半構造化面接調査により質問項目の表面妥当性と内容妥当性、実現可能性を確認した。因子妥当性、内的一貫性、再テスト信頼性を確認し、14 項目 3 因子(否定的感情の表出、情報の伝達・共有、関係性)の尺度を用いた。他に母親の乳がんに関する経験と基本的属性を尋ねた。乳がんサバイバーの質問紙調査において、PTG は the Posttraumatic Growth Inventory(PTGI)を用い測定し、基本的属性、医学特性を尋ねた。

4. 調査手順

病院：研究者もしくは施設の調査責任医師が、包含基準を満たす乳がんサバイバーを選定した。担当医が簡単な説明をした後に、研究者が直接説明し、書面にて同意を得た。乳がんサバイバー用、子ども用の質問紙を配布し、回答を依頼した。

患者会：患者会の運営責任者が、包含基準を満たす乳がんサバイバーを選定した。研究説明文と協力依頼を対象者のメールへ一斉送信し、参加者を募った。参加者が所定の画面に入力した住所宛に乳がんサバイバー用、子ども用の同意書、質問紙が入った封筒を郵送し、回答を依頼した。

質問紙には研究用 ID を付け、乳がんサバイバーと子どもの質問紙を連結させた。

5. 分析

各変数の記述統計を算出した。子どもの PTGI-C-R 得点は先行研究と 1 標本 t 検定を実施し比較した。子どもの PTG の関連要因および母親とのがんに関するコミュニケーションとの関連を検討するため、PTGI-C-R 合計得点を従属変数とした階層的重回帰分析を実施した。Step1 では、先行研究で PTG と関連が示されている変数を投入した。Step2 では、母親とのがんに関するコミュニケーション得点を投入した。IBM SPSS Statistics version 24.0 を用い、有意水準は両側 5%とした。

6. 倫理的配慮

東京大学大学院医学系研究科・医学部倫理委員会と、各病院の倫理委員会の承認を受け実施した。子ども用質問紙は乳がんサバイバーが確認し、子どもへの研究説明、参加の可否を判断するよう依頼した。病院では、チャイルド・ライフ・スペシャリストへ協力依頼し、サポート体制を確立後に調査を実施した

【結果】

97 組を分析対象とした。子どもの平均年齢は 14.8 歳、女性が 51 名 (52.6%)、教育機関は中学校が 53 名 (54.6%) と多かった。母親の乳がんへの罹患を知らされた時の平均年齢は 12.5 歳であった。乳がんサバイバーの平均年齢は 46.0 歳であった。乳がんのステージは、I 期が 37 名 (40.2%)、II 期が 35 名 (38.0%) と多かった。現在の治療状況は、64 名 (66.0%) がホルモン療法中、15 名 (15.5%) は定期検査のみであった。過去の治療内容は、手術療法が 87 名 (89.7%)、化学療法は 41 名 (42.3%)、放射線療法は 42

名（43.3%）であった。

PTGI-C-R 合計得点は平均 9.0 ± 7.7 であった。下位尺度では「他者との関係」「人生に対する感謝」の得点が特に高かった。震災経験のある子どもの得点と比較した結果、合計得点と全ての下位尺度得点において有意に低かった。

PTGI-C-R 合計得点を従属変数とした階層的重回帰分析の結果、step1 では、PCL-5 合計得点 ($\beta = 0.191, p = 0.034$)、MSPSS 家族からのサポート ($\beta = 0.239, p = 0.032$)、乳がんへの罹患を知らされてからの期間 ($\beta = 0.241, p = 0.016$)、乳がんサバイバーの PTGI 合計得点 ($\beta = 0.188, p = 0.046$)、乳がんサバイバーの年齢 ($\beta = -0.371, p < 0.001$) は有意な関連を示した。Step2 では、母親とのコミュニケーション合計得点 ($\beta = 0.247, p = 0.012$) は有意な関連を示した。1 下位尺度ずつ入れ替えて投入した結果、否定的感情の表出 ($\beta = -0.217, p = 0.014$) と情報の伝達・共有 ($\beta = 0.326, p = 0.001$) が有意な関連を示した。

【考察】

乳がんサバイバーの子どもの PTG は、震災を経験した子どもの PTG と比べて低かった。PTG とストレス症状は逆 U 字の曲線的な関係にある。本研究の子どものストレス症状を測定した PCL-5 合計得点は高くなかったことから、母親の乳がんへの罹患というトラウマティックな出来事の強度が低かったことが、PTG の低さに影響を与えたと考えられる。「他者との関係」「人生に対する感謝」の PTG 領域が高い傾向は、がんサバイバーの家族員を対象とした先行研究と同様であり、家族員ががんに罹患したことによって経験する PTG はこの 2 つの領域が特徴的であることが示された。

関連要因について、ストレス症状が強いほど子どもの PTG は高まった。先に述べたように、PTG とストレス症状は逆 U 字の関係にあり、本研究ではストレス症状が強いほど PTG は高まったと考えられる。家族からのサポートは子どもの PTG に関連し、乳がんによって混乱や負担が生じる中でも、家族からのサポートを得ることで乗り越え、PTG が高まると推察される。乳がんサバイバーが PTG を強く経験するほど子どもの PTG は高まった。治療や副作用などを直接経験する母親が PTG を経験する姿から影響を受け、子どももまた PTG を経験すると考えられる。

コミュニケーションについて、否定的感情の表出が行われているほど、PTG は低下した。子どもが感情を表出することで、母親と子どもが意図せず互いに傷つけ、PTG が低下した可能性が考えられる。横断研究のため因果関係を明確にできないが、PTG を経験している子どもは心配をかけたくないという配慮から、自身の感情について、母親とコミュニケーションをとらない傾向にあることも推察される。情報の伝達・共有が行われているほど、PTG は高まった。乳がんに関する情報を伝えられることで、家族の一員として認められていると実感し、子どもの PTG につながると考えられる。

【結論】

乳がん罹患した母親をもつ子どもが経験する PTG の実態について、「他者との関係」「人生に対する感謝」に関する PTG を特に経験していることを明らかにした。

子どもの PTG には、母親の乳がんへの罹患に対するストレス症状の強さ、知覚する家族からのサポート、母親の乳がんへの罹患を告知されてからの期間、母親である乳がんサバイバーの年齢、乳がんサバイバーが経験する PTG の高さが関連した。

母親とのがんに関するコミュニケーションと子どもの PTG は関連し、情報の伝達・共有が行われているほど、PTG は高まったことを明らかにした。母親が乳がんに関する正しい情報を子どもに伝えることができるように支援する重要性を示した。一方で、否定的感情の表出が行われているほど、子どもの PTG は低い結果となった。子どもが抱える感情の表出の仕方を確認しながら、状況や性格に合わせた支援が必要であることを示した。